岡山の美術展

［会場］
岡山県立美術館２階
「岡山の美術」展示室

特別陳列 布貼り絵作家 藤田桜展

2010年3月24日（水）～5月9日（日）

このたび、岡山県立美術館では、特別陳列「布貼り絵作家 藤田桜展」を開催いたします。

藤田桜は、東京に生まれ、大妻学院を卒業後、編集者として出版の仕事に携わり、婦人雑誌や手芸誌、絵本などに創作人形や手芸、童画などを発表、NHK女性教室の講師を務めたりしました。昭和27(1952)年から月刊絵本「よいこのくに」(学研)の表紙を担当。藤田の作品は、絵具の代わりに布地を切り貼りしながら画面を作るという独自のもので、「よいこのくに」の他、「チャイルドブック」「ひかりのくに」など昭和30～60年代に保育園や幼稚園で配布された多くの幼児絵本の表紙を飾りました。そこには布地の質感や色、柄を巧みに組み合わせ、月々の風物や小動物、子どもたちの姿が生き生きと表現されています。

昭和38(1963)年、夫である高橋秀(美術作家)のイタリア留学に伴い、渡伊した後もローマで仕事を続け、家事や育児をしながら、絵本や絵画を創作、イタリアや日本国内で発表してきました。創作絵本は、ボローニャの絵本見本市(学研ブース)に展示され、昭和52(1977)年には、児童書のイラストレーター選集に、世界20ヶ国37名のひとりにも選ばれました。

平成16(2004)年に帰国し、倉敷市玉島沙美に居住。一昨年、長らく学研が保管していた絵本8冊分の原画を取り寄せ、岡山市内で原画展を開催。布貼り絵という独自の手法で創り出された楽しく美しい、そして見る人の心を和ませる表現が注目されました。このたびの特別陳列では、106点の絵本原画に加え、現在も制作発表している布貼り絵(コラージュ)作品を紹介します。

会期中には、関連事業として、作家によるアーティスト・トークやワークショップ「布を使って絵を描く」、当館のボランティアスタッフによる絵本の読み聞かせ会を行います。ご家族そろってお楽しみください。

【学芸員　福冨　幸】

「スパゲティなら　まけないわ」より

「みずうみは　なぜこおる」より

停止した暮色

「中村昭夫の写真」2010年3月24日（水）～5月30日（日）

［主催］岡山県立美術館

倉敷市出身の中村昭夫(1933-2008)は、主に岡山の自然や歴史・文化を半世紀にわたって撮り続けた写真家です。

当初緑川洋一に師事して写真の道に入った中村は、報道写真家・編集者として知られる名取洋之助の知遇を得て、岩波写真文庫『倉敷』の撮影を行い、ドキュメンタリー写真の方法論を体得しました。そして高度成長期以降、倉敷を拠点としながら、人々の生活や社会の移り変わりを地道に記録する写真家として活動しました。これらの仕事は、時代の証言となりうる写真の力を再認識させるものです。

《李ラインの漁民》より「追跡される日本漁船」1962年

また中村は、ふるさと岡山県の自然や歴史・文化に深い愛着を持ち続け、四季折々の表情を見せる風景のほか、文化・芸術界の人々の肖像や、社寺・遺跡・町並みなどを、精力的に撮影しました。当県の地域資源をほぼ網羅していると言っても過言ではない、その膨大な撮影の成果は、多くの単行本などに結実し、広く知られているところです。

本展では、岡山の写真界・文化界に大きな足跡を遺して一昨年他界した中村昭夫の業績を、その初期の作品から、主要な作品によって振り返り、地域に根差したドキュメンタリーへと向かった、戦後昭和期の一写真家の軌跡を明らかにします。

大林千萬樹「胡笳の声」

特　別　展

プノンペン国立博物館／シハヌーク・イオン博物館所蔵
世界遺産 アンコールワット展 ～アジアの大地に咲いた神々の宇宙～

2010年4月20日(火)から5月30日(日)まで、特別展「世界遺産アンコールワット展～アジアの大地に咲いた神々の宇宙～」を開催します。

「アンコール遺跡群」はカンボジア王国にある東南アジア最大規模の文化遺産で、1992年にユネスコの世界遺産にも登録されました。9世紀から15世紀まで600年にわたるアンコール王朝時代、歴代の王たちは仏教、ヒンドゥー教の寺院を建造し、その壁面には神話や装飾文様の浮彫をめぐらし、内外に神像や仏像を安置しました。それらの彫像や建造物は、今日世界中から高い評価を得ています。この建造物群の中で最も有名なものが、12世紀にスールヤヴァルマン2世(1113～50頃)により創建された「アンコールワット」です。

「美しい尊顔の禅定する
プラジュニャーパーラミター
（般若波羅密多菩薩）」
砂岩製、高さ33cm
（シハヌーク・イオン博物館所蔵）
日本初公開

「鎖座する閻魔大王ヤマ天」
砂岩製、高153cm
（プノンペン国立博物館所蔵）
日本初公開

今回の企画展では、プノンペン国立博物館およびシハヌーク・イオン博物館のアンコール王朝最盛期の彫像作品と民族工芸品を中心に全67点を公開いたします。出品作品の中には、2001年に上智大学アンコール遺跡国際調査団がバンテアイ・クデイ遺跡で発掘した仏像11点が含まれ、本展最大の見どころとなっています。ほかに三島由紀夫が戯曲の題材にしたと言われる、高さ150cm以上にも及ぶ砂岩の丸彫による大彫像「ヤマ天(閻魔大王の坐像)」なども、本邦初公開となります。

アンコール王朝の歴史を彩る至高の精華が一堂に会します。ベールにつつまれたその歴史に触れ、アンコールワットに息づく神々の息吹を感じてください。

なお、岡山会場では特別企画として「朱印船貿易時代の日本と東南アジア」に注目したコーナーを設けます。江戸時代初期、鎖国令以前の数十年間、貿易に富を求める日本人にとって第一の活路となったのが東南アジアでした。このような時代にアンコールワットを仏教の聖地「祇園精舎」と信じ参詣した日本人もいました。その落書(墨書)は、アンコールワットの壁面十数カ所に遺されています。このコーナーでは、そのころの東南アジアが日本人にどう捉えられていたのか、古地図ほかの実物資料やパネルにより紹介します。

平成22年度 展覧会スケジュール(3月～5月)

特別展紹介（地下1階展示室）

4月20日（火）～5月30日（日）　「世界遺産 アンコールワット展　～アジアの大地に咲いた神々の宇宙～」

岡山の美術展紹介（2階展示室）

3月24日（水）～5月9日（日）　特別陳列「布貼り絵作家 藤田桜展」

3月24日（水）～5月30日（日）　「中村昭夫の写真」

編　集　後　記

美術館ニュース88号をお届けします。ニュースの編集担当になり、2年の月日が経とうとしています。その間、延べ8冊の美術館ニュース発行に携わりました。「8」という数字は、漢字の「八」が末広がりを表す形状として、わが国では縁起の良い数字とされています。このたび、「8」冊目の「88」号を持ちまして、編集担当を交代することとなりました。編集担当者として至らぬ点も多々あり、読者の皆様に十分な内容の紙面を提供できたとは言い難く、反省しております。深くお詫びするとともに、新編集担当者の発行する館ニュースにご期待いただければと思います。

【S.T.】

美術館ニュース 第88号
発　行：2010年3月
発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL：086-225-4800
E-Mail　kenbi@pref.okayama.lg.jp

岡山県立美術館
THE OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

美術館ニュース

88
2010 SPRING

表紙の作品

大林千萬樹　『胡笳の声』大正二～三年頃　絹本着色一幅　一四二・〇×七〇・八cm

「胡笳」とは、中国の古代北方民族が吹いたという葦の葉で作った笛のこと。胡笳の音色の余韻にひたるかのように、二人の女性がうっとりとした表情で座っている。女性の中国風の衣装や調度類は丁寧に描かれ、作者大林千萬樹（一八八七－一九五九）の中国への憧れを物語っている。千萬樹は岡山市に生まれ、若くして上京し富岡永洗に日本画を学んだ。永洗没後は川合玉堂、鏑木清方に師事。大正二年の第十三回巽画会で本図《胡笳の声》が褒状一等となったのち、主に再興院展を舞台に活躍した。歴史風俗に取材した華麗な美人画を多く描いているが、その表情は可憐な少女や妖艶な女性、平安王朝の姫君や浮世絵風美人と様々に展開する。「大林千萬樹」展（笠岡市立竹喜美術館・二〇〇四年）、「美人画－描かれた女たち・魅惑の女性美」展（井原市華鼎大塚美術館・二〇〇九年）等でスポットが当てられ、再評価の機運が高まっている。

【主任学芸員　中村　麻里子】

鍵岡館長の美術館体験の記④

「美術館とデザイン」②

美術館のなかに入ると、エントランスから最も主要な展示室、それにレストラン、ライブラリー、ミュージアム・ショップなどがある。今回のテーマは、展覧会会場での展示デザインについてである。

美術館にとり生命線である収集された所蔵品を展示する室（空間）は、今日の美術館では大きく２つに分けられる。ひとつは所蔵作品を、たえず展示する室、もうひとつは美術館が企画した展示空間である。前者の常設展示室との呼称は嫌われる。なにより収蔵作品をたえず研究する学芸員がいて初めて美術館活動は成立するが、その学芸員が所蔵品を漠然と展示するのでは、美術館の意味は小さい。その作品の意義や価値を引き出すためのテーマ展など、鑑賞するものを説得しなければならない。そのための展示計画やデザインが創意工夫されねばならない。後者の幅広い美術を紹介する企画展示は、今日では美術館活動の大きな柱となっている。

1920年代から始まった近代美術館での展示空間は、作品を展示する白い壁面と矩形の空間から、ホワイト・キューブと特徴的に呼ばれる。ホワイト・キューブに展示された作品は、本来ある壁面から切り離して展覧会の意図に沿い展示し直されて、美術史的価値を多くの人々に観てもらう。ところが現代美術の多様な展開、また美術概念の転回は、展示空間に流動的な空間（オルタナティブ・スペース）を要求する。作品の必然により空間が変化するのだ。いわば美術作品を美術史的な価値の類列から、美術作品を直截に提示する、というわけである。

僕の体験では、セゾン美術館という展覧会専門の美術館空間での展示デザインで、イサム・ノグチの現代美術や古代エジプト展でみせた、建築家磯崎新の展示デザインは抜群であった。それ以外の展覧会でも、担当学芸員の明快な意図と展示デザインの専門家による展示が上手にゆくと、観る者を快適にした。それら専門家の技法は、東京国立近代美術館など各地の美術館で生かされている。

今日の地方美術館は、たとえ制限が多い展示空間であろうと、展覧会を企画し担当した学芸員の意図が明瞭であれば、自ずから展示デザインは方法的に決まる。よく考慮された展示デザインの空間でみた美術品は、見るものにとって本質的な何かを覚醒させてくれる。展示デザインの意志ある感性は、重要である。　【館長　鍵岡正謹】

よそんちの展覧会 －動物園編－

今年、我が家の年賀状を飾ったのは、息子が虎にえさをやるスナップでした。暮れに訪れた池田動物園での「虎のえさやり体験」で、トングでつかんだ肉片をシューターに入れるというものですが、檻の中の虎とは30センチぐらいの至近距離。おっかなびっくりで、すっかり腰が引けています。池田動物園では、象の鼻先にりんごやバナナをあげる「象のえさやり体験」のほか、販売機でヤギや鹿、熊やあひるのえさを買ってあげることもできます。また、熊や猛禽類のえさやりを見学し、飼育員さんから、動物たちの特性やえさの種類といった話から、熊のプールの水道代がバカにならないとか、動物たちの高齢化が進んでいるとか、動物園のさまざまな事情を聞くことができ、博物館人としての好奇心をくすぐられます。（言わずもがな、動物園も水族館も広義の博物館ですから…。）

虎のえさやり体験（池田動物園）＊期間限定

「行動展示」で動物園を変え、一躍有名になった旭山動物園に倣い、各地の動物園もずいぶん様変わりしました。「えさやり体験」や「ごちそうタイム」（「もぐもぐタイム」「ぱくぱくタイム」など呼び名はいろいろですが）は、動物たちの生き生きとした動きを見ることができるということで、今やどこの動物園や、水族館でも行われている人気プログラムですし、バックヤードツアーや夜の動物園など、動物を知る、動物園を知る、さまざまなプログラムが用意されています。狭い檻の中で反復行動を繰り返す動物がいなくなったわけではありませんが、動物たちの住環境も少しずつ改善されているように見受けます。

パンダの屋外運動場（神戸市立王子動物園）
自然環境を取り入れた開放的な空間で、パンダが食事する姿を見ることができる。

子どもを持つまで、久しく訪れていなかった動物園や水族館ですが、大人になった目で見ると、子どもの頃とはまた違った魅力を感じます。生き物を扱うということは、その命の生老病死につき合うということで、生易しいものではないでしょう。子どもたちと一緒に動物たちの動きや表情を楽しみながら、同じ博物館人として、裏方の苦労を思いやりつつ、動物園と美術館、「博物館」について考えています。（続）　【学芸員　福冨　幸】

博物館教育国際シンポジウム

「伝統文化を伝えるために博物館ができること」出席報告

去る１月、福冨学芸員と東京国立博物館で開催された博物館教育国際シンポジウム「伝統文化を伝えるために博物館ができること」に出席、ならびにポスターセッション㊟に参加しました。岡山県立美術館では毎年「日本伝統工芸展岡山展」を開催しており、普及事業のヒントに出来ないか、というもくろみからの参加です。

まずは当日のプログラムの紹介です。

■第一部：東京国立博物館の事例
- 東京国立博物館の教育普及－伝統文化を伝えるために
- 『仏像のひみつ』から博物館へ
- 使う器の魅力へのアプローチ－特別展『染付－藍が彩るアジアの器』を例に

■第二部：さまざまな館の事例を通して ～自国の伝統文化・美術を伝える
- 体験型博物館による伝統文化の継承（千葉県立房総のむら）
- イギリス文化の普及のための展示室における多様な取り組み（ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館）
- 次世代を伝統文化につなげるためにできること
  －オーストラリア国立博物館トークバック・クラスルームを中心に（オーストラリア国立博物館）
- 楽しく、親しみやすい学び
  －シンガポールに生まれたプラナカンの文化を伝えるために（シンガポール国立アジア文明博物館）

・パネルディスカッション

様々に紹介された中でも、東京国立博物館で行われた２つの事例『仏像のひみつ』と『染付－藍が彩るアジアの器』が印象に残りました。

「仏像彫刻の鑑賞方法を知る」や「身近なだけに見過ごされがちな陶磁器の美を引き出す」等をテーマとし、なされた工夫が紹介されたのですが、それぞれの情報量とその整理の関係が気になりました。

少し乱暴になりますが、双方から学んだことをまとめると、全体的な情報量をある程度制限し、その中で章ごと、また個々の作品についての情報量は充実させ、そうしてまとめた全体の情報の階層ごとに順序だてて見せ方、展示デザインを計画する。目的を「教育」にある程度しぼった展示でこそ可能な方法かもしれませんが、分かりやすさについて、情報量という面から考える大きなヒントになりました。

また、事例紹介ののちに行われたパネルディスカッションでは、利用者調査やキャプションの量について等にも改めて触れられ、どの館においても悩みは共通なのだなあ、と感じましたが、そもそもシンポジウムに集まったきっかけであるところの、伝統文化を伝えるにあたって感じる、現代の生活の中では伝統文化を身近に感じてもらいにくい、という問題もまた共通のようです。

その解答として、今や遠く離れてしまったように見える伝統文化でも現代との間に必ずある共通点を見つけ、現代の言葉であらわすことだ、という示唆があり、そして「そこをつなぐところがデザインよ」と福冨学芸員から金言をもらいました。

事例紹介でふれた事との関連になりますが、情報の整理、視覚化はデザインが得意とするところです。子どもには楽しい、面白いと感じてもらう事が、最もつながりやすい。大人にとってもおおもとは同じですが、また違う方向からのアプローチもあり得るでしょう。情報の質を落とさず、それぞれの人に、または全ての人に伝えていく。基本の部分（コンセプト、テーマ、切り口、色々な言葉で言えますが）が共有できれば、デザインを介してそういった事が可能なのではないでしょうか。

ポスターセッションの様子

当館のポスターセッション展示物（1）

当館のポスターセッション展示物（2）

最後に、私自身としては、ポスターセッションを担当し、これまで岡山県立美術館が行った伝統文化関連の教育普及事業を年ごとにまとめたものを出展していました。しかし、足をとめる方がやや少なく、それこそテーマ主導といったところの煮詰めや、他館に比べ手にとれる実物の展示や体験が足りなかったか、と反省しました。上記とあわせ、今後の課題としていきたいと考えています。　【学芸員　子川さつき】

※ポスターセッション：研究発表をポスター形式にまとめ、参加者に自由に見て貰うやりかた。

新収蔵品紹介

原田直次郎「上野東照宮」

当館は、原田直次郎（1863～1899）の「上野東照宮」明治22年（1889）油彩・キャンバス 75.5×58.5 を購入した。この作品は、アメリカから里帰りしてきたものであり、どのような経緯で海を渡ったのかについては、分かっていない。画面左下に年記とサイン「Naojiro H 1889 Tokyo」があり、1889（明治22）年の制作であるが、日本で展覧会で発表されたという形跡は見当たらない。上野の東照宮の前に立つ家族を描いており、明治22年の時点での原田家の家族の年齢構成と一致することから宮参りの情景を描いたものと推定されてきた。新興公子氏作成の年譜によると明治22年前後の原田および原田家の様子は以下のようになる。

1881年8月3日	直次郎、大久保政親の次女さだと結婚。
1883年7月13日	長女寿（ひさ）生まれる。
1884年2月16日	渡欧
1887年7月	帰国。
1888年10月17日	次女福（とみ）生まれる。12月本郷6丁目にアトリエを新築。
1889年1月	本郷アトリエで画塾「鐘美館」を開く。
1890年4月1日～7月3日	第三回内国勧業博覧会の審査員となり、「騎龍観音」と「毛利敬親公肖像」を出品。

上野東照宮

上野東照宮部分

家族肖像画

1889（明治22）年にこの絵が描かれた時、直次郎は26歳、長女寿（ひさ）6歳、次女福（とみ）は半年以上にはなっていたはずである。妻のさだの年齢、直次郎の母あいの年齢は確認できていないが、それぞれ20台半ばと40代後半から50代にかけてであろうと思われる。父原田一道（1830～1910）は59歳である。宮参りの習慣からすれば、赤ん坊を抱くのは母のあいのはずであるが、人物の顔立ちは中年の婦人には見えない。この人物は20代の男性のようであり、直次郎自身である可能性もある。写真と比べて見ても顔立ちは似ている。

直次郎が赤ん坊を抱いているという前提で推論を重ねると、この家族の肖像は実際に見て描いた情景ではなく、赤ん坊を抱く自分を想像して描いていることになる。ドイツで歴史画を学んだ原田直次郎にとって、このように絵を「しつらえる」ことは造作もないことだった。この頃原田は「騎龍観音」の大作と「毛利敬親公肖像」を制作しており、これらが内国産業博覧会に出品した公的な作品であったのに対して、私的な作品「家族肖像画」であったことになる。それが展覧会に出品されなかった理由であり、何時の時点でか海を渡ったものと考えられる。

原田直次郎肖像（30代）（素描）

10代後半の直次郎（写真）

建築画の観点から

背景が上野の東照宮であることには、当時の流行ともかかわりがありそうである。そしてお宮参りという日本の風俗的要素もアメリカ人のジャポニズムにかなう要素があったのかも知れない。

明治20年代、日本の寺社建築を描いた建築写生的な作品が数多く描かれている。管見では、以下の作品図版を目にすることができた。

曽山幸彦「上野東照宮」明治23年　油彩・キャンバス　60.5×100.0　鹿児島市立美術館
小林萬吾「芝増上寺」明治25-26年（1892-93）油彩・キャンバス　97.3×180.0　愛媛県美術館
安藤仲太郎「日本の寺の内部」明治26（1893）油彩・キャンバス　107.3×76.7　神奈川県立近代美術館
五百城文哉「輪王子・常行堂」明治30年頃（c.1897）油彩・キャンバス　43.5×66.8

古田亮氏はこうした作品について、明治美術会系の画家がよく手がけており、その源は工部美術学校でのアントニオ・フォンタネージの指導に行き着くものと考えられるとしている。フォンタネージが指導した洋画教育の課程では油彩による風景写生を最終目的としていた。フォンタネージは「寺の門」（1878～79）を描いているし、彼に学んだ松岡寿には「芝徳川廟」（1878年頃）の素描がある。こうした作品は、洋画に対する実学的な考え方が強かった当時の社会通念にかない、且つ日本独特の建築様式ということで、外国人の関心を惹くものでもあったのではないかと推測される。特に「照り起くり（てりむくり）」の日本独特の屋根の形や複雑な柱や軒装飾を正確に描くのは、建築描写の訓練があっても難しそうだが、原田は工部美術学校で学んでではいないにもかかわらず難なくこなしている。

原田の作品は90点ほど確認されているが、人物画が多く風景画は少ない。そしてこの作品のような寺院建築は他に例がない。しかし本作品は単なる寺院建築画ではない。風景画であり、明治日本の風俗を描いた風俗画であるともいえる。また、原田家の人々が描かれているとすれば、家族肖像画であり、珍しいテーマの作品といえよう。森鷗外は、帰国後も原田と親しく交友したが、原田の家族について次のように書いている。“私の友人にも女房持のものは少なくないが、その家庭を覗いて見て、実に暖かに感じたのは原田の家庭である。…原田と細君と子供四人と、そこに睦まじく暮らしていて、私が往けば子供は左右から、おじさんと呼んで取りついた。…想うに原田は必ずしも不幸な人ではなかった。”（原田先生記念帖より）

このように原田は家庭を大事にする情愛深い父親であったようであり、留学中の留守を守ってくれた家族への感謝の思いもあったろうし、この絵にふさわしい家庭を築いていたように思われるのである。

【学芸課長 妹尾克己】